慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ミトラニイ著 的場・斉藤・深沢訳 マルクスと農民
Sub Title	
Author	渡邊, 國廣
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.7 (1956. 7) ,p.526(38)- 528(40)
JaLC DOI	10.14991/001.19560701-0038
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19560701-0038

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評及び紹介

ミトラニイ　著
的場・齋藤・深澤譯

『マルクスと農民』

二つの大戰の間には種々な事件があり、最も注目すべきは中歐諸國における農民運動の擡頭と、農民政黨の出現であろう。この事情はもつと早く研究さるべきであつた。しかし問題として取上げられるようになつたのはやつと第二次大戰以降に過ぎない。

著者のミトラニイ教授はこの面の先驅で、既に多くの著作がある。以下で取上げるのは一九五一年の著書で、これまでの研究に對する結論的見解を示そうとしたものであつた。

本書は、一方から見れば、一九一八年以降のヨーロッパの社會史で最も知られない部面について詳細な報告ということが出來よう。第一次から第二次大戰までに中歐諸國で農民をめぐつて起つた種々な問題についての記述は正確であり、その意味で本書は中歐諸國の農業問題研究のための資料として十分な價値を持つ。農民運動の指導者と個人的に新しい著者以外には達することの出來ない精緻がある。

しかし著者が眞に意圖したところは、研究の貴重な前提となるべき資料を提示することにあつたのではない。その表題から明瞭な如く、著者の計畫は遠大である。本書は中心の課題において、マルクス主義と農民主義との間の長い鬪爭の歷史を概括することを目指した。社會思想史上の一つの盲點を衝くもので、非常に意味の深い企てといわねばならない。

この飜譯が出るより早く、筆者は原著を通讀する機會を持つた。以下は、その折の覺書から、譯書を得て整理したものに過ぎない。ただ本書の梗概を的確に傳えて外れなければ幸いである。

著者によれば、農民に關するマルクスの見解は「經濟的綱領というよりも歷史的命令であつた」。專ら西歐の研究に基づき、農民輕視を基礎とした。マルクスは小土地保有が最大生産に合致しないと明言し、土地の大規模な集中を豫言して、農民の消滅を確言した。この豫想は小土地保有が數において增大した時くつがえされた。カウッキーその他がマルクスの見解を現實に適合さすべく修正しようとしたけれども、非常な窮地に追込まれ、農村問題に無經驗であつただけに甚だしかつた。もし資本家的集中が革命の必要な前提であつたならば、社會主義者は小規模耕地の消滅を助長すべきであろう。しかしこのことは、革命のために社會主義者が中立を期待しなければならない農民と不和にするであろう。政策の問題として、一八九〇年代まで西歐の多くの社會主義政治家は、理論家が非難し續けたにも拘わらず、マルクス理論に關係なく農民の支持を求めていた。このため西歐で農民は、勞働者が自由主義から社會へ移つた時に自由主義から保守主義へ走つた。一方工業化が十分に進行していない東歐では、農民主義者がマルクス農業理論の反對者として指導に當つた。

レーニンは、東歐で農民の支持がブルジョア民主革命にとつて必要なことを知つていた。ルーマニアのマルクス主義者ドブロゴス＝ゲレアは一九一〇年に、東歐の大領地（ラティフンディア）で農民は、形式的に解放されたとはいえ新しい農奴制（ネオ・イオバギイア）度の下で生活しており、そこでは社會的、經濟的に古いものと新しいものの二つにある最惡なものが混在していたと論じた。後れた農業國に對し加えられた資本主義の衝擊で生産の組織は契約の形態に變つたが、相當の部分はなお奴隷制的であつたのである。ゲレアは大所領の解體、小農經營の育成を資本主義確立のための必要な手段として支持した。著者は彼の分析を「正しい」とした。マルクス、レーニンと違い、ゲレアは農民に對し眞に同情した。しかしマルクス主義者として當然彼は工業化を支持し、從つて初期の農民主義者の農業社會の理想に反對であつた。レーニンが革命に關心を寄せた場所で、ゲレアは社會主義に關心を寄せた。しかし彼の見解は中産階級にも農民にも認められなかつた。この重要な理論家を西歐に紹介したのは本書が最初である。

共同體（ミル）に對するスラヴ主義者の信仰に立つて、農民主義者は共同體が生産增加の手段であり、かくて目的それ自體であると主張した。マルクス主義者はこれを決して容認することが出來なかつた。農民主義は、知識層の反スラヴ的、親歐的傾向にも拘わらずロシアからルーマニアに入つた。ルーマニアの農民主義者ステレにとつてマルクス主義は農業國の社會的特色を無視した「神秘家の獨斷」であつた。ステレはルーマニアが工業化において西歐に追隨することが出來ないと明言し、かわりに家內工業を要求した。これら初期の農民主義者は協同組合が小農經營の理想社會を助成すると信じた。マルクス主義者が生産に關心を寄せたのに對し、農民主義者は生産者に關心を寄せた。後にロシアの新農民主義者は工業發展に關しマルクスの理論から多くを受取つた。しかし依然として階級對立には反對し、また土地の國有化を支持したが、しかしマルクス主義を激怒させた「用益權における平等」を達成する手段としたに過ぎなかつた。知られる如く、マルクス主義と農民主義は革命の綱領において對立的なものであつた。

著者はロシア革命を「ボルシェヴィキが關係し組織した廣範な農民革命」と述べ、次いで革命直後の混亂と窮乏の時期、新經濟（ネ）政策と集團化の恐るべき時代におけるソヴェトの農業理論と政策を追う。ロシア農民は、かなり進んだとはいえ「プロレタリア社會主義の精神に」未だ完全に徹底し得なかつた。農民に對する勞働者の割合を著しく增大せしめた工業化によつて市民的（シヴィック）等質（ユニホーム）はかなり達成されたが、都市と農村の對立は解消されていなかつた。集團化は、ロシア農民に對し共通な集團的利害を與えた。從つてソヴェト體制の下で農民と勞働者は積極的に結合していたわけではない。著者は、農民主義の理論に從つたならば、階級對立の不安が避けることが出來なかつたかどうかを問題として提起している。

ロシアのほか、ハンガリーを除く東歐諸國で、第一次大戰を終つて政府は、ボリシェヴィズムの滲透を恐れ、土地改革を斷行した。ゲレアの新しい農奴制度は、土地所有者が、最小限の賠償と交換に、著者が主張する如く、政治權力にすがりつくため、土地を放棄した時に終つた。支配階級としての地主の消滅は社會革命を意味した。市場のための農民經營から生活のための農業經濟への轉換は經濟革

命を意味した。農民の政治生活への進出は政治革命を意味した。しかし如何なる改革も農業には起らなかつた。農村の過剰人口は增大した。小土地保有・散在地條・遲れた經營が依然として特徴的であつた。交通機關の改良を怠ることによつて、生産物の種類を增加させるより專ら穀物生産を奬勵することによつて、工業を育成することによつて、政府は農民を無視した。舊地主は官僚と軍に流込み、貨幣を主要都市の西歐化に使用し、また新しい工業のために補助金を要求した。新しい間接税や重い保護關税が農民の負擔において開始された。商人階級は農民の搾取者として舊地主の役割を讓り受けた。しかし農民にとつて私有制は勞働者にとつての社會保障と同一物であるため、小農經營は世界的農業危機を切抜けることが出來た。

著者は、農民運動の急激な擡頭とその成功は支配階級を大いに驚かせ、憲法の民主的條項を罵倒するにいたらしめたといつた。事態が悪化するにつれて農民の不滿は益々大きくなつた。農民の不滿が增大し危險な狀態になると、政府は結局獨裁政治にいたらざるを得なかつた。獨裁制は「官僚的・軍隊的制度以外の何ものでもなく、非能率的、壓制的であると同時に碎け易いものであつた」。王黨・軍隊・官僚は農民攻擊で同盟し、社會主義者もこれに參加した。「東歐諸國では次々と權力を合法的に握ろうとする農民團體の主張は裏切られた。かかる過程は、先ず一九一九年のハンガリーに始まり、次いで一九二三年のブルガリア、一九二六年のポーランド、一九二九年のユーゴスラヴィア、更に一九三一年のルーマニアに續いて起つた」。民主的方法を捨てることを潔しとせず、農民運動は敵の不正と暴力の犠牲となり、そのうえ西歐の民主諸國から理解も支持も得られなかつた。

第二次大戰以來農民階級撲滅の政策は一層强化された。ロシア人と共産主義者の傀儡は、レーニンの方策に從つて、中歐諸國に階級對立を育て、新しい土地改革を斷行し、集團化を早めるために强壓を加えた。特に一九四八年のチトーとスターリンの訣別以來、ソヴェトで經驗された農民階級撲滅への諸段階が一段と强力に推進された。政策の轉換は、勞働協同組合という形態を目指して、そこでは經營を集團化するが土地は國有化でない體制が考えられていたことのなかに、また任意加入の原則を確立するために說得を利用したことのなかに現われている。しかしマルクス主義の理論は不變であり、力を用いることなくしては決してどこでも勝利を收めることが出來なかつた。新しい農奴制度は再び我々と共にある。これが本書で著者が語らんとした主要な教訓であつた。（法政大學出版局　昭和三一年二月　四五〇圓。原著は Mitrany, David, "Marx against Peasant; A Study in Social Dogmatism" 1951, London pp. 348.）

（渡邊　國廣）

フランス革命と民衆運動

George E. Rudé, "The Outbreak of the French Revolution" *Past & Present*, November 1954 pp. 28-42.
Soboul, A. "Robespierre and the Popular Movement of 1793-4" *Past & Present*, May 1954 pp. 54-70.

フランス革命の原因を追求して、一般に、學者・法律家・不平官吏・フリーメーソンが計畫した謀叛に歸さない。專ら階級對立の結果と見て、最近は特に都市と農村における民衆の問題・抱負・運動について研究が進められて來た。

その結果、革命における民衆の役割は明確となつた。しかしその位置づけについて必ずしも定見はない。革命の過程を最初に貴族の反逆（ノブレスコンプレス）、次いで市民（ブルジョワジー）の反抗（レボルテ）、最後に民衆運動に分つたことから知られる如く、マティエは民衆の介入に對し二義的意義を付したに過ぎず、民衆運動を市民（ブルジョワジー）の行動に刺戟されて起つたと見た。一方ゲランは民衆運動に最大の重點を與え、革命の中心的勢力は市民（ブルジョワジー）でなく、賃銀取得者ですらあつたと極言した。また革命の勃發を經濟的要因から說明したラブルースは、十八世紀の物價の變動が革命を起すに足る强力な民衆運動を展開せしめたと考えた。

民衆運動を如何に解すべきか。と同時に、貴族の反逆、市民の反抗についても正しい意味づけがなされなければならない。二つの小論はこういつた問題に對する一つの提言であつた。

一七七四年チルゴーが大藏大臣に任命された。そして早くも九月には取引の自由を回復した。このため一七七五年に入つてパンの價格は高騰し、普通精々九スーであつた四ポンドのパンが三月上旬に一一スー二分一、四月下旬に一三スー二分一となつた。騷動が各地で起つた。先ずディジョン、ツール、メッツ、ライム、モンターバンで騷動。急速にパリへ波及。二〇マイル北のボーモン・シュール・オワスで四月二七日に起つた騷動が、二九日にはポントワスに、五月一日にはサン・ゲルマンに、二日にはヴェルサイユに、三日にはパリに達す。そしてセイヌとマルヌの谷に沿つて擴大し、數日でブリに、九日には五〇マイル南のボーモン・シュール・ガティーネに、一〇日には近くのメランに及んだ。いわゆる穀物（ワ・ゲェール・デ・ファリーヌ）鬪爭である。

正にそれは飢餓と缺乏の恐怖から自然に起つた運動であつた。都市の貧困者・農業勞働者・農村の職人ばかりか、農場主・富裕な市民までが加わり、大擧して農場主・富裕な保有農・穀物商人・粉屋・パン屋を襲擊した。若干の聖職者は教區民がこれに加わることを少しも制限しなかつた。市場監督官のなかには價格を引下げて便宜を考える者もあつた。

しかしこの運動は革命に結び付かない。食糧危機が緩和して一〇月には價格が低下し、騷亂は自然に消滅した。保有農の大部分は加わつていぬ。市民（ブルジョワジー）は現存する秩序に反抗するまでにならず、チルゴーを自分らの階級に屬すると考え、これが指導する政策に反對する運動に敵意すら感じ、むしろ取引の自由を支持した程であつた。